

きょうは今日という作品を

仕上げさせていたたく日

東井 義雄(とうい よしお)

高等小学の時のことです。今でいうと中学一年か二年ということになります。この頃はみんな、何かに反抗してみたくなる年頃なのかもわかりません。それとも、私はひどい貧乏の中で育ちましたので、子どもの頃からひねくれていたのかもしれない。元日の日記に、

「みんな、めでたい、めでたいといっているが、何がめでたいのか、どこがめでたいのか、山も川も、いつもとおなじではないか、何もかも、きのうのつづきではないか。どこがめでたいのか」

そんなことを書いたのを思い出します。たまたま、父がそれを読んで、

「おまえ、おもしろいことを考えるなあ」

と云う、

「だって、ほんとのことだもん…」

と云ったことを思い出します。

でも、皆さん、新しい年を迎えることが、なぜめでたいのでしょうか。どこがめでたいのでしょうか。山も川も、何もかもいつもと同じではないですか。私自身を考えてみても、ぬけてしまった頭髪や歯が、新年を迎えたことで新しく生えはじめられるということもありそうには思われません。もの忘れのひどくなった頭のはたらきが、新年を迎えたためにシヤンとしてくれたということもなさそうです。体だけではなく、くらしのあり方だって、「元旦や、またつかうかのはじめかな」ということになることは、ほぼ、まちがいなさそうです。

私は、正月三が日だけではなく、年中、未明に起床します。起きると、冷たい水で体中をこす

ります。健康のためと考えたことは一度もありません。体中にしみついてしまっているような「うかうか」をこすりおとすためです。私の人生は、もうとくに日が暮れてしまつて、最後の日が目前に迫つてきています。「うかうか」はゆるされない時になつてしまつているのです。冷たい水で体中に目を覚まさせながら、「今日という作品を、きょうは、精いっぱい作品に仕上げさせていた

だく日」と、私自身に、きびしく言い聞かせるのです。

「拝まれゆるされ 生かされている私」東井義雄より